

第6回 自治体シンクタンク 研究交流会議 開催レポート

1 会議の概要

市政研究センターは、平成30年11月16～17日に宇都宮市民プラザにて「第6回 自治体シンクタンク研究交流会議」を開催した。会議内容は次のとおりである。

《全体テーマ》

「自治体シンクタンクの果たすべき役割とは」

《11月16日(1日目)》

- ・基調講演
- ・パネルディスカッション
- ・グループディスカッションⅠ

《11月17日(2日目)》

- ・グループディスカッションⅡ
- ・エクスカージョン(希望者)

以下、会議の様子を内容ごとに報告する¹。

2 基調講演

市政研究センターの元所長で宇都宮大学名誉教授、現在は宇都宮共和大学特任教授の古池弘隆氏より「住めば愉快だ宇都宮～100年先も誇れるまちを～」をテーマにご講演いただいた。

以下、講演の抄録を掲載する。



写真1 古池 弘隆氏

「皆さんようこそ宇都宮にお越しいただきました。今回の基調講演にあたり、事務局からいわれたのが『自治体シンクタンクにおける政策研究などの取組の意義や今後のあり方について』お話しくださいと。これを聞いたときにとっても私はそんな(難しい)話はできませんといいました。ですから今日は、この自治体シンクタンクがこれまでにどんなことをやってきたか、それがどう現在に生かされているかという意味で、私が最初から関わっている、いわゆる都市ブランドについてお話ししたいと思います。

私は20年間宇都宮大学に勤めた後、平成19年度から平成21年度まで市政研究センターにお世話になりました。その中でブランドに非常に興味を持ちまして、その後自分の研究テーマとしても勉強しております。市政研究センターでは、私が来る前の年、2年にわたり都市ブランドとシティセールスの研究を、そして在任中には、宇都宮の市民性に関する調査研究をやりました。このあたりから都市ブランドをどう考えるか、私なりの考え方が少しずつ出てきて現在に至っています。

宇都宮は餃子のまちとしての認知度は非常に高い。ただ、ジャズやカクテルの認知度は市民の間でも低いです。また、都市のイメージとして、外から見ると庶民的で、のどかだけれども、何の印象も浮かばない。餃子以外は何も思いつかない。先ほどの市民性の研究でわかったことは、宇都宮市民は奥ゆかしい、目立ちたがらない、日本一になりたいと思わないのです。そこで、住民の誇りというものを高めて、もっとブランドを高めようと思っているわけです。

都市ブランド力の高まりと、来訪・宿泊数、投資の間には強い相関関係があります。都市ブランドを活用すれば、非常にまちづくりに有効です。宇都宮の都市ブランド戦略は、統一したブランドメッセージのもとに市内外に向けて発

¹ 本稿に掲載している写真は、全て市政研究センター撮影。

信していこうというものです。そのためには、まずは魅力づくり、それからその魅力を発信する。市民には、自分のまちに誇りを持ってもらう。そして外から宇都宮に憧れを持ってもらえる。こういう循環関係、相乗効果を強めていくのが大事だろうと思っています。2009年には、宇都宮ブランド推進協議会を作りました。私は最初の会長として現在に至っています。そこではまず『住めば愉快だ宇都宮』という、ロゴ、メッセージを決めまして、市民参加型の都市ブランド推進をやりました。愉快市長、愉快市民、愉快ショップ、愉快ラジオ、愉快CMコンテストなどいろいろなことをやっています。その効果として認知度ランキング、2008年に111位だったものが、今年42位となり、魅力度、情報接触度ともに上がってきています。これは宇都宮の実力が広く認められつつあることだと思います。ただ、外に対してはどうなのだと。よそからの注目度は必ずしもまだ高くないのではないか。そこで、4年前からはダブルプレイス、2地域で生活してもらうことで、交流人口を増やそうということをやっています。

宇都宮のこれからの挑戦として、都市ブランドを上げる最良の方法は、その都市の魅力そのものを改善し続けることであると思います。すなわち本当の意味で住めば愉快的なまちづくりを進めていかなければならない。ということで、今宇都宮では都市ブランドというものが、かなり重視されております。そのきっかけをつくったのが、実は14年前、この市政研究センターがはじめた都市ブランド、シティセールスの研究だったということを申し上げて、最初にいただいた自治体シンクタンクにおける政策研究の取組の意義、今後のあり方についてという事務局からの宿題に対して、私なりのお話とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。」

3 パネルディスカッション

テーマを「自治体シンクタンクの役割と位置付け」とし、各自治体シンクタンクにおける特徴的な取組や今後の役割と可能性についてディスカッションを行った。以下、内容の一部を紹介する。

《パネリスト》

内海 巖氏 上越市創造行政研究所 上席研究員
中本隆彦氏 彩の国さいたま人づくり広域連合 主幹
上野晴彦氏 とよなか都市創造研究所 所長
千本直男 うつのみや市政研究センター 副所長

《コーディネーター》

渡辺博芳氏 帝京大学理工学部 教授
(市政研究センター 企画運営アドバイザー)

《コメンテーター》

古池弘隆氏

渡辺氏：パネリストの皆様が所属する自治体シンクタンクは、いずれも平成12年の初め頃に設立された団体です。長年の活動でいろいろとノウハウも蓄積されていると思いますので、設置経緯や取組などをご紹介いただければと思います。

内海氏：平成12年に市長直属の組織として、市役所組織内設置型として始まり、途中存続の危機などもありながら、現在は企画部の中にあります。

中本氏：平成11年に発足しまして、埼玉県と県内全63市町村で構成される特別地方公共団体という形です。中心的な業務は職員の人材開発、職員研修ですが、その中で研究活動も行っています。

上野氏：平成9年に任意団体として設置され補助金で運営されていましたが、研究機関としての充実を図るため、平成19年に市役所の政策企画部内に再設置されました。

千本：平成16年に市の内部組織として設置されました。平成9年策定の市の第4次総合計画のプロジェクトや前市長のマニフェストの1つだったことなどにより設置されました。

渡辺氏: シンクタンクなので調査研究が主になりつつも、実は人材育成や庁内の調整とかいろいろな役割がありますね。その役割は自治体によって重点が違ってくるというお話もありました。では次に、課題について情報共有をしたいと思います。

千本: 各種庁内支援の件数の増加とともに、本来業務である調査研究を進めることが難しくなっていること、職員の研究スキルの習得と継承、情報収集及び発信の難しさなどがあげられます。

上野氏: 増大化する政策課題を限られた研究者で調査研究するため、研究テーマの選定が非常に難しい。また、市民への情報発信の機会が少ないことも課題と捉えています。

中本氏: 人事異動により、ノウハウが蓄積されづらい。人が変わってもしっかりと引き継ぐ体制づくりが必要と感じています。

内海氏: 研究できる人材をどう育てていくか。これは普遍的な課題なので、皆さんと一緒に研究してもう少し論理的にできるのではないかと思います。ただ、人事異動で研究所の経験者が増えて、そういう能力が市役所の中に蓄積されていくのはうれしいことであると感じます。

古池氏: うつのみや市政研究センターができて5年目、今から10年前に座談会をした際にも今日と同じような課題を話した記憶があります。シンクタンク同士のこのような情報交換や交流は非常に大事で意義があると思っています。

渡辺氏: 今日課題として出てきたものについて、その自治体で優先順位をつけてどこに力を入れるのか、よく考えていく必要があるかなと思いました。研究にどう学術的価値を持たせるかという話もありましたが、研究の段階から市政にどう役立つかを常に意識して進めることも重要だと思います。パネリストの皆様、古池先生から貴重な意見を頂戴し、みんなインスパイアされた部分もあるのではないかと思います。ありがとうございました。



写真2 パネリストの皆様



写真3 古池弘隆氏(右)と渡辺博芳氏(左)

4 グループディスカッションI

グループディスカッションIでは、自治体シンクタンクにおいて調査研究を遂行する上での課題と、それに対する取組や改善策に関する知見を共有することをねらいに、「政策研究における調査研究手法」をテーマとした。

事前に、全国の自治体シンクタンクを対象にアンケート調査を行い、それぞれの自治体シンクタンクにおける運営上の課題を整理した。課題は、「調査研究に関すること」、「庁内支援に関すること」、「情報発信に関すること」、「組織運営に関すること」、「その他」の5項目に集約した。

会議では、アンケート結果を参考にしながら、8グループに分かれてディスカッションを行った。

各グループで、各組織が抱える課題やその傾向を共有し、課題解決に向けた方向性を検討した。多くのグループでは、ふせんや模造紙を用いながら、

課題の整理・共有を行った(写真4)。

このディスカッションでは意見の共有を主眼としたため、自由な雰囲気で行うよう心掛けた。中には、哲学対話¹という手法を用いて話し合いを行っているユニークな班もみられた(写真5)



写真4 グループディスカッションIの様子



写真5 グループディスカッションIの様子

各グループの話し合いでは、「研究成果を施策に結び付けるためにはどうしたらよいか」、「調査研究の意義が組織内で認知されていない」といった調査研究に関する課題や、「人事異動により配属されるので職員の専門スキルが足りない」といった組織運営上の悩みなど、多くの意見が出された。

最後に、すべてのグループがディスカッションで得た知見を発表した(写真6)。会議後に実施した

アンケートによると、回答者の約9割がグループディスカッションIに対して「満足した」と回答し、課題の共有ができた点が評価された。その一方で、時間不足で解決策の議論ができなかった点を指摘する意見が多くあった。



写真6 発表の様子

5 グループディスカッションII

グループワークIIでは、「持続可能なまちづくり」をテーマとした。交通や観光といった個別テーマごとに各自治体が抱える課題を抽出・集約し、全体で共有するとともに、今後のまちづくりの方向性を検討することをねらいとした。

グループディスカッションIと同様に、事前アンケートを用いて会議で共有したい行政課題を整理した。「都市づくり」、「まちづくり」、「ひとづくり」、「生きがいくづくり」、「人口減少対策」、「にぎわい創出」の6分野に集約された。

会議では、アンケート結果を参考にしながら、整理した分野を基に6グループに分かれてディスカッションを行った。それぞれのグループで、自治体ごとのテーマに関する現状・課題を共有し、課題解決に向けた方向性を検討した(写真7)。

最後に、すべてのグループがディスカッションで得た知見を発表した。

¹「人の話をよく聴く」、「わかりやすく話す」など、対話を主目的とした技法を指す。寺田敏郎「哲学対話の可能性」
https://kokushikan.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=12522&file_id=189&file_no=1, 2019年2月25日取得



写真7 グループディスカッションⅡの様子

- ・都市づくり班: 都市の将来像の設計に議論が集約された。国や各都市はさまざまな手段によって新たな都市づくりをしているが、将来ビジョンをどう描くかが課題。
- ・まちづくり班: 市民・行政・民間という3つの柱とそれらへの対応策が紹介された。組織、関係づくりのうえで行政はプラットフォームに位置付けられる。プラットフォームの上で民間などとの関係をどう構築するかが課題。
- ・ひとづくり班: 子育て・地域包括・若者に着目した。人と人との関係、face to faceの関係が不足している。行政の立場としては、人と人とのニーズをどうつかみ、対応させるかが課題。子ども、お年寄りなどそれぞれのライフステージに応じたケアが必要である。
- ・生きがいづくり班: 「居場所」がキーワードとなった。人間の欲求として生命、安全などのほかに、所属の欲求というのが精神的な部分で重要になる。これをひとりひとりにどうつくるかが求められる。合わせてその結果として、従来の平均寿命に代わって健康寿命をどう伸ばすかが、生活や人生の質に関わってくる。
- ・人口減少対策班: 将来の地方創生に関わるテーマであり、つまるところは地域の魅力である。企業が新しい工場を建てる、事業所を設置することは移住のきっかけにつながる。その中でも住む人たち、自然などの総体が魅力となると考えられるが、これをどうつくるかが重要。
- ・にぎわい創出班: 豊橋市の事例発表が印象的であり、これはいわば行政は後ろに退き黒子に徹し、企業が主体的に地域づくりに関わるという方法である。行政の役割としては、演出家のようにその地域の中でいろいろなアクターが気持ちよく活動できるようにしっかりと準備をするという役割になる。演出というのは都市づくり班というビジョンにもつながる。

グループディスカッションⅡ 三橋所長講評

6 今後に向けて

参加者からは、全体を通して自治体シンクタンク間の交流や情報の共有を図れたことが有意義だったという意見が多く得られた。自治体シンクタンクの職員同士は、日頃交流の機会がないため、ほかの自治体シンクタンクの状況が把握できていない。このような機会を通じて情報交換を行うことは有益であり、それこそが自治体シンクタンク研究交流会議を開催する意義である。

参加者からは「毎年同じようなテーマ、結論になるのではないか」という意見が出された。一方で、今回取り入れた都市の個別テーマを話し合うグループディスカッションⅡの満足度が特に高く、各シンクタンクの研究成果を話し合いたいという意見もあった。今後は、より具体的な都市課題を話し合う機会として活用することなどによって、自治体シンクタンク研究交流会議をさらに深化させていく必要がある。

最後になるが、今回の会議を企画するにあたり、戸所隆先生をはじめとした自治体シンクタンク研究交流会議アドバイザーボードの皆様に多大なるご支援をいただいた。また、会議の進行にご協力いただいた市政研究センター企画運営アドバイザーの先生方、昨年度主催し丁寧に引き継ぎしていただいたかすかべ未来研究所の皆様、ご参加いただいた全国の自治体シンクタンク職員の皆様に感謝申し上げます。（藍原・伊藤）



写真8 エクスカーションの様子（大谷資料館）